浜田けい子＝作

コスモス塾（じゅく）・ニッポン3（スリー）

高橋　透＝絵

コスモス塾・ニッポン3（スリー）

高橋　透＝絵

NDC●913
みんなの文学＝22
182P/22cm

書名●コスモス塾・ニッポン3

作者●浜田けい子Ⓒ
画家●高橋　透
発行●株式会社金の星社
〒111 東京都台東区小島1－4－3
電話・03(861)1861
振替・東京0-64678
装丁●杉浦範茂
印刷●平河工業社
製本●東京美術紙工
初版発行●1985年2月

ISBN4-323-00537-7

Printed in Japan
乱丁落丁本は，ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

はじめに

『コスモス塾・ニッポン』

もしも
こんな　名の塾を
どこかで　見かけたら
ぜひ　行ってみたまえ。
ドアの　むこうに
ふしぎな　ことが
まっているよ。

●コスモス塾・ニッポン3／もくじ

ことのはじまりは、土曜日の午後　7
K・TWO星って、なんだ？　24
ここは、宇宙のまっただなか　40
光のすじと、つむじ風　59
まよいこんだのは縄文時代　75

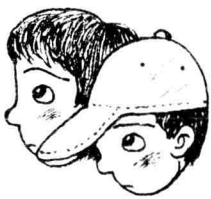
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たからの小刀をさがせ！　92
死んだ星に、みどりの木を　118
ひろったメダルの暗号は？　146
なぞの十四面体　163
あとがき　180

コスモス塾（じゅく）・ニッポン3（スリー）

浜田けい子＝作
高橋　透＝絵

1　ことのはじまりは、土曜日の午後



いそいそとした足どりで、一歩前を歩いていくお母さんのせなかを見て、

「あーあ。ぼく、野球のメンバーのことで、みんなと、そうだんがあったのになあ。」

と、ためいきをついたのはマコト。その声をきいて、ちらっと、横にいるマコトのほうを見たのが、姉のスミレだ。

ふだんは、とてもおしゃべりなのに、スミレは、ふきげんにだまりこくって歩いている。

「さっさとしなさい。もう、すぐだから。」

お母さんは、ふりむいて、ふたりをいそがせた。

スミレは六年生、マコトは三年生。これから、お母さんにつれられて、学習塾へ行くところだ。

塾と名のつくところへ行くのは、これがはじめて。きっと、前の学年で、きょうだいそろって、成績が、あんまりひどかったからにちがいない。

よりによって、きょうは、たいせつな土曜日の午後。それも、学年さいしょの土曜日だ。友だちとのやくそくもあるし、小学生だって、いろいろといそがしい。それなのに、お母さんは、きゅうに塾へ入れるといいだした。

「お母さん。まだ、つかないの。」

よそゆきの服をきせられたマコトが、きゅうくつそうに、たず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ねた。
「この商店街を、まっすぐに三分ほど行くと、おすし屋さんがあって……ほら、あそこ。あのかどを、まがるのよ。」
お母さんは、手にもったメモ用紙をひらひらさせた。
「左がわの五けんめの、あたらしいビル。あった、あった。一階が楽器屋さん。お店の横の階段をあがる……。あれが階段だわ。」
お母さんのメモは、いつになく正確だ。
階段をあがると、そこはホールになっていて、つきあたりに、ドアがあった。ドアには、大きな看板が、おもおもしくかかっている。
看板には、金色の字で、
『コスモス塾・ニッポン3』
と書いてあった。

お母さんは、ノックをしてドアをあけると、ふたりのせなかをおすようにして、中へはいった。

へやは、ひろびろとして明るく、きれいにそうじがしてある。まんなかに、丸いテーブルをかこんで、いすが六つならべてあり、そのわきに、ひょろっと背の高い男の人が立っていた。

「あの、きのう、電話をいたしましたホシノです。新聞にはいっていた広告のちらしを見まして……。」

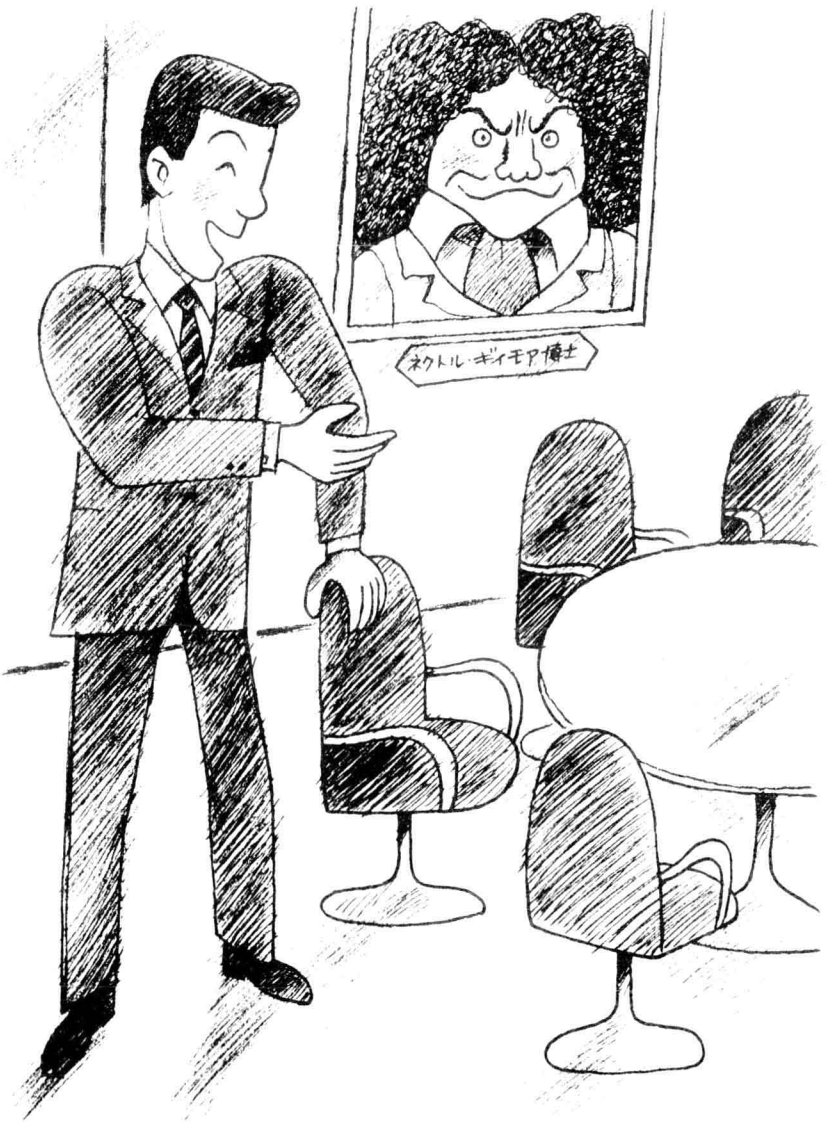
お母さんがあいさつをすると、

「はい。ホシノさんですね。よくいらっしゃいました。おおしえした地図、わかりましたか？」

男の人は、にっこりわらって、いすをすすめた。

「スミレさんとマコトくんだね。元気そうな、いい子たちだ。」

「はあ、まあ、なんとか。」


ネクトル・ギィモア博士

と、お母さんは、ふたりを見た。
「この子たちにも、そろそろ勉強をさせなくては、と思いまして。スミレは、もう六年生ですし、マコトものんびりやなので、気がかりで……。」
「お子さんのことは、おまかせください。『コスモス塾・ニッポン3』は、この新学期からはじめたばかりですが、申しこみが、もういっぱいきています。」
男の人は、ちょっととくいそうだ。
「お月謝、とてもお安いんですね。」
お母さんがいった。
「コスモス塾は、商売ではありませんからね。これは、地球の子どもたちをしあわせにするために活動している、世界的な組織がひらいている塾なんです。」

男の人は、せつめいをはじめた。
「コスモス塾は、世界二十八か国にあります。そして、ここは、日本で三番めにつくられた塾です。」
「あ、わかりました、それで『コスモス塾・ニッポン3』なんですね。」
お母さんは、感心している。
「そうです。これからも、日本のあちらこちらに、4、5、6……と、できるでしょう。もちろん、世界じゅうの国ぐににも。塾長先生は、りっぱなかたです。」
男の人は、かべにずらりとかかっている写真に目をやった。みんなもつられて、そちらを見た。
「あれは、塾の先生がたの写真ですが、どなたも、すばらしいかたばかり。右のはしが、世界じゅうのコスモス塾の塾長先生、ネクトル・ギィモア博士です。」

もじゃもじゃの、山みたいにもりあがったかみの毛、ぎゅっとよせたまゆ毛……。写真のギィモア博士の顔は、ものすごいしかめっつらだ。するどい目つきで空中をにらんでいる。

「あら、この顔、あたし知ってるわ……。」

スミレは、首をかしげた。この顔の人に、どこで出あったのか、さっぱり思いだすことができない。

マコトは、すっかりたいくつして、あくびをかみころしていたが、写真を見たとたんに目がさめた。塾長先生が、ぎょろりと、こっちをにらんだような気がしたのだ。

そんなふたりにはおかまいなく、男の人は、写真の先生たちをつぎつぎに紹介し、さいごに、

「わたしは、ニノミヤ ギンジロー。『コスモス塾・ニッポン3』の塾長代理で、算数をおしえることになっています。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com